認定 NPO 法人「じゃっど」

帖佐 理子 理事長

「ラオスの子どもたちのために、何かしてあげたい」「じゃっど！」。1992 年、「認定 NPO 法人じゃっど」（以下、じゃっど）は、そんなやり取りをきっかけに薩摩川内市を拠点として始まった。「学校でとなりの席の子がノートを忘れたら、自分のノートを一枚ちぎって渡しますよね。同じような感じで、東南アジアの途上国であるラオス人民民主共和国（以下ラオス）で学校保健に関する活動をしよう。子どもたちが健康に育ち、教育を受けられるように支援しようという目的で生まれました」と語る帖佐理子（ちょうさみちこ）理事長。じゃっど 30 年の歩みは、まさに SDGs の精神を先取りして実行してきたもの。立ち上げの経緯やこれまでの活動、今後の目標について、帖佐理事長に話をうかがった。

薩摩川内市東開聞町にある「認定 NPO 法人じゃっど」事務局。今までの活動の記録や視察ツアーのアルバム、ラオスの旅行ガイドや工芸品である布織物の本などが並び、さながら小さなラオスライブラリーといった雰囲気だ。理事長である帖佐理子氏は医師として働きながら、ラオス滞在をきっかけに現地の事情を知り、帰国後の 1992 年 12 月、じゃっど活動を立ち上げた。2023 年、活動 31 年目を迎える。

－じゃっどの活動について教えてください

帖佐理事長「ラオスにおける学校保健支援活動をしています。その背景には、薩摩川内市や鹿児島県の人たちに途上国の実情を知ってもらって、世界全体の公正公平を考えていただきたいという思いもあります。私の夫である帖佐徹医師が、ポリオ根絶プロジェクトの JICA 専門医として、1992 年ラオスに派遣されました。11 月から 12 月にかけて、私は夫を訪ねてラオスに行きました。初めての町を歩き、子どもたちの声のするほうに歩いていってみたら、学校があった。教室には壁も扉もない。水道もトイレもない。子どもたちは鉛筆やノートも持っていない。帰国後、当時私が所属していた川内青年会議所のメンバーに見てきた様子を話しながら、『何かしたいな、井戸でも掘りたい』と言ったら、『じゃっど。せんね』という言葉が返ってきた。その反応が嬉しかったですね。その頃はすべての中心は東京、といった感じがあって、私としては川内が中心でもいいでしょ？と思っていたので、川内を拠点にして活動を始めたかった。そこで、鹿児島弁で「じゃっど」と名付けて、NPO を立ち上げました」

－学校にトイレや水道を引き、手洗いを推進する「小さなお医者さんプロジェクト」など、じゃっどの活動は SDGs17 の目標に多数、該当しています

帖佐理事長「SDGs の前身として、MDGs：ミレニアム開発目標というのがあり、さらにその前段階として 1970 年代に各国で別々の目標を立てるのではなく、先進国も途上国も含めた世界共通のゴールとして、『2000 年までにすべての人々に健康を！』という動きが生まれていました。この動きを背景に 1978 年、WHO：世界保健機関とユニセフ共催によるプライマリヘルスケア会議で採択された『アルマ・アタ宣言』が、MDGs そして現在の SDGs につながっています。“Health for ALL.” という精神はじゃっどの活動とも

共通するものです。プライマリヘルスケアとは、医師や看護師が病院でするものだけではなく、住民たちが自分たちで井戸をつくる、トイレをつくる。みんなが健康についての意識を持つことが重要だ、と変化してきたのです」

－SDGs の源流、小さな流れのひとつとして、じゃっど活動も始まった

帖佐理事長「最初の活動は私や夫の帖佐徹、現地の友人たちが手弁当で始めました。ラオス人のドクターが「学校に援助をしてよ」と言うので、ラオスの首都であるヴィエンチャン特別市の郊外にある学校に一緒に学校に行きました。中に入ると、壁がゆらゆらしている。生徒の親がお金を出し合って、れんがを作って、木の壁をれんがの壁にしたが、芯が入っていなかったんですね。補強のための不足分の援助を行いました」

「次第に周りの人たちも活動に興味を持ち始めて、ラオス人ドクター、徹医師、オーストラリアからのWHOの医師、ロシアから来ていたユニセフの医師が集まり、話し合いをしました。そこで出たのは、建物をつくるのは簡単だけど、やっぱりソフト面を援助するのがいいんじゃない？ということ。知識というのはずっと持っていける。子どもたちに学校保健のソフトを渡す NPO をやろうと、じゃっどの方針が固まりました」

「その後、日本に帰国し、川内青年会議所（JC）がサポートをしてくれたラオスでの活動報告を行いました。以降、ラオス人ドクターや大学教授、ラオス保健相、教育省の官僚たちと公私ともにパートナーシップを築き、現地のじゃっど活動は彼らが担当してきました。なかでも長年、中心的なメンバーとして動いてきたのが保健相の官僚であったソムチット氏とコンサップ氏の夫婦でした。先生たちに保健教育をし、子どもたちに伝えよう。そのための教材を整えよう。学校に井戸やトイレをつくろう、というじゃっど活動が彼らの協力を得て、大きく動き出しました。先生たちはみな、プライベートな時間を割いて協力してくださいました。井戸ができた、トイレができた、そしたら次は手洗い運動をしよう！オリジナルで手洗いの歌（アナマイ・ソング：衛生の歌）を作り、歌唱コンテストも開催されるなど、広範囲に拡大することができました。保健衛生教育と併せて、栄養の充実にも力を入れました。当時はビタミン A 不足で鳥目（夜に視力が落ちる）の症状を持つ人が多かったので、食用油を支給しましたが、翌日市場で売られているのを目にしたこともありました。今では笑い話ですが、思ってもみないことはたくさんありました」

スタディツアーでのひとコマ。ラオス料理にチャレンジ！

現地の事情に合わせて、衛生や栄養のことをわかりやすく学べる紙芝居をつくり実演したり、先生向けにそれらの教材の使い方を教えるセミナーも行った。これらの活動は、日本からラオスを訪問した学校の先生、保育士の先生たちが担当し、通訳は青年海外協力隊の人たちが協力するなど、多くの人がじゃっど活動に賛同し、協力をしてくれた。活動は順調に進んでいたが、10 年が経ったころ、帖佐理事長はある危機感をおぼえたという。

> 帖佐理事長「このままでは金の切れ目が縁の切れ目だな、と（笑)。日本で集めている寄付金や助成金のおかげで活動が出来ているが、お金がなくなったら何もなくなってしまう。どうしたらいいだろう？と考えました。いろんな知恵を絞った結果、ラオスの学校教育のカリキュラムに、じゃっどが行っているような学校保健の授業を入れてしまえば、たとえじゃっど活動が終わったとしても、知識は継続して伝えられていく。そう思って、徹医師や保健相の人たちと一緒に、大臣がそのへんのレストランで食事したりしているので、そこに出向いて話をしに行きました」

保健相や教育省の大臣との距離感が近かったのも功を奏したという。熱意を持って話をすると、学校保健って何？と興味を持ってくれた。医師や看護師が言うのではなく、日ごろから接している学校の先生たちが子どもたちに衛生の話をすることが重要なんです、意味があるんです！と訴えた。時を前後して、NPO じゃっどは JICA（国際協力機構）の開発パートナーシップ助成金に応募し、採択された。ラオスにおける日常的な健康問題のひとつが感染症だ。なかでも「鉤虫」が体内に入り込み、肝臓から血を吸うことで貧血を起こす症例が後を絶たない。裸足で畑にいると足の裏から感染するので、草履を履くというシンプルな行為で状況は改善できる。まずは鉤虫に焦点を絞って、感染防止活動を行った。検便をして駆虫薬を配布する。お母さんに「鉤虫感染」の情報を伝える。顕微鏡を購入し、生徒の検便をして、寄生虫がいるかどうか調べる。ひとつずつやっていった。自分たちだけでは人力が足りないので、工夫をした。ラオスの検査技師養成学校に教材として顕微鏡を供与し、看護学生の授業、実習の一環として検査をしてもらうと、活動も進んでいった。

この「鉤虫プロジェクト」は、JICA に加えて WHO、ユニセフ、ラオス政府にも来てもらい、成果を報告した。「学校の先生から子どもたちを通して、保健の知識が村じゅうに広がります！」と力強く発表した。この活動に影響を受け、JICA はラオスの健康に関するボードゲームを作成して配布した。じゃっどの活動やその成果は現地でも確かな評価を獲得していた。日本政府から文科省に派遣されていた京都教育大学の教授や、じゃっどの JICA プログラム遂行者としてラオスで活動した吉田いつこ氏らが、ラオスの教育省に働きかけた結果、教師養成プログラムに学校保健が正式に採用されることになった。

> 帖佐理事長「やったー！と万歳しました。これで、自分たちが活動を引き上げたとしても、システムの中に入ったから、学校保健は残る。ラオス政府や教育機関も巻き込んで、いろんなタイミングが重なって、後世まで続く成果をあげることができました」

みんなでダンス！

－帖佐理事長の考える、持続可能な社会とは

帖佐理事長「残念ながら活動が止まってしまった NPO もあります。私たちも、以前はずっと活動をし続けるのではなく、“発展的撤退”を掲げ、目標を決めて達成したら撤退しようと思っていた時期もありました。今思うのは、継続することの大切さ。援助を地道に続けていたら、MBC 賞という賞をもらいました。いただいた賞金を何に使おうか考え、薩摩川内市の高校生、鹿児島県の大学生のスタディツアー参加支援に使いました。それまでも、地元の高校生、大学生、医学生の参加などありましたが、より範囲を広げて国際交流、視野を広げる活動を提供することができました。30 年という継続の間、活動の中身も変化してきましたし、活動メンバーも日本もラオスも二代目に受け継がれて、続いています」

ベストセラーの絵本をラオスでも楽しんでもらえるように

世界中に広がったコロナ禍の間、現地での活動も思うように展開できず、日本からのスタディツアーは中止せざるを得なかった。その間は、以前から続けてきた「絵本を贈る運動」に注力した。日本語の絵本にラオス語の翻訳シールを貼り、ラオスに届けるもので、学生や親子の身近なボランティア活動として、多くの参加者に協力してもらっている。

－今後の展望を教えてください

帖佐理事長「NPO じゃっど、ラオスをもっと知ってもらいたいです。親しみを感じてもらいたい。わがことのように考えてもらうには、どうしたらいいだろう？そんなふうに考えます。次世代に活動を受け渡すためにはどうしたらいいだろう、とも。川内で始めた活動なので、この地で続けていけたらいいなと思います。コロナ禍を経た 3 年。期せずして、じゃっどが伝えてきた手洗いの大切さを世界中が知ることになりました。その間ラオスではどんな変化があったのか。今、どんなサポートが可能なのか？今年は理事で現地視察を行い、来年以降の具体的な活動につなげていく予定です」

－読者のみなさんに、メッセージをお願いします

帖佐理事長「地球の上にはいろんな人たちが住んでいる。どこかでつながって、影響し合って、私たちの今の生活は成り立っている、ということを感じてもらえたらうれしい。今はいろんな動画を見ることができるから、現地に行かなくてもいいのかな？と思ったりもするけど、ラオスに行って足に泥がついたりすると、『これだよ、これなんだよ』と思います（笑）。行かないとわからないこともあります。あっ、これはラオスでつくったものだ。だけど、ラオスでは学校にトイレがなくて、学校に行きたくても行けない女の子がいる。アフリカでは手を洗う水もないところもある。フィリピンの子どもたちはあの台風のなかでどうやって暮らしているんだろう。たったひとつの地球。少しでも思いを馳せてもらえたら、いいなと思います」

認定 NPO 法人じゃっど：https://www.jaddo.or.jp

（2023 年 6 月取材）